

論文の内容の要旨

論文題目 港市長崎におけるキリシタン施設に関する研究

氏 名 ヴィエイラ アマロ ベビオ

1.1. メインテーマと研究目的

本研究の主な狙いは、16 世紀後半から 17 世紀前半までの港市長崎のキリスト教化過程を分析することである。特に、既存の日本寺社と関連する施設をキリシタン施設に取り換えるために、イエズス会の宣教師たちによって採用した戦略を中心にする。このキリシタン施設は、教会だけではなく礼拝堂、墓地、公的空間と道で置かれた大きな十字架、植木や祭壇なども含める。

第二の研究目的は、そのキリシタン施設の建築的・空間的な特徴を分析し、どのようにヨーロッパ教会の空間と日本の建築的な要素を混じて「キリシタン空間」を生じられたのかを明らかにすることである。また、修士論文で作成した長崎湾のデジタル地形モデル利用を出発点とし、1571年と1622年の間における、その宗教的な施設と港市長崎の都市発展を関連付けて考えることである。その施設の位置と港市の発展は密接に絡み合っていたが、1614年から徳川幕府は徐々にキリシタン施設を根絶し始めた。幕府によって元の宗教組織を原状に復された方法と港市への影響も本研究の一つのテーマである。

1.2. 研究方法

既存研究は日本語と元来言語の西欧史料を比較することが少ないであるが、本研究では史料からより幅広い内容・情報を提供するつもりである。

まず、西欧・日本の様々な史料から長崎のキリシタン施設とその儀礼空間に関する証言を収集・整理し、これらのキリシタン施設の経時変化を描いたタイムラインを作成すること。そして、その文書データは南蛮屏風に描かれている教会と長崎湾のデジタル 3D モデルと比較し、西欧と日本史料における矛盾・不一致を解決すること。

本論文では次に、歴史的文書に基づくデータを用いて、できる限りに港市の人口に関する統計データを収集し、毎年の洗礼数、住宅数などを特定する。ここでの情報の由来のほとんどは、イエズス会の内部原稿（殉教者のリスト）や、当時のキリスト教徒の共同体からの内部文書（「長崎ロザリオ組中連判書付」）、反キリスト教の人口調査報告（「平戸町人別生所紀」）である。

1.3. 博士論文の構成

本論文の中心は、1569年から1620年まで長崎で存在していた宗教的な建築を分析することであるが、このメインテーマの背景として、港市長崎の都市史とイエズス会の支配・南蛮貿易の影響に関連する様々なテーマもある。例えば、長崎の人口の構成、人口の増加によってスプロール現象の舞台になり、巨大な貧富の差の出現、西欧商人たちによって性的サービスと奴隷の需要を満たすための遊廓と奴隷の地区の出現、または宗教的な学校、及び大事な客を収容する宿泊施設と商品価格の交渉の場として同時に機能したイエズス会本部の進化。これらのテーマの多様な性質のために各テーマは別々の付録で分析され、その結果がメインテーマに組み込まれている。

第一章から第八章までの時期区分は、キリシタン建物の存在期間と港市長崎に起きた重要な出来事と相関している。本論文の主な点を踏まえて検討する第九章は、キリシタン建築に対してイエズス会の態度と戦略については、五つの時期に区別することができる(1549年～1554年、1555年～1579年、1580年～1600年、1601年～1613年と1614年～1620年)。

2. 1549年～1554年

来日したイエズス会の宣教師は最初からできる限りに基督教の基礎的な原則を裏切らずに日本文化への適応を試みた。なお、彼らの戦略は「置換」のことばで定義できる(López-Gay, 1970年)。すなわち、まず土着の施設や儀式を、それに似せたキリスト教的なもので置換し、その後基督教の儀式の強化に伴い、徐々にヨーロッパ風の要素を導入する、というものであった。

宣教師の活動を支援していた日本人はほとんど仏教信者であったため、その日本人が基督教の概念を日本語に通訳したとき、仏教の用語を使用する傾向があった。宣教師と基督教徒の文書の中で(日葡辞書・羅葡日対訳辞書を含む)キリシタン教会堂を指摘する用語は仏教から由来する(1555年からポルトガル語とラテン語の用語も導入された)。

イエズス会の教会はほとんど地元の人々から寄贈された寺院・家屋であり、宣教師たちは厳しい経済状況の下でその建物をそのままで使用し、建築的な変更は特に実施されなかった。

日本人の神仏信者はイエズス会が単に別の仏教宗派であったことを考えるのは珍しくはなかった。宣教師の最優先は「偶像」(神を表現するオブジェクト)の破壊であり、建物の空間は最初の大きな問題ではなかった。いわゆる「キリシタン空間」は完全にポータブルな性質であり、ポータブルなレタブルム、祭壇、絵画、基督教のモチーフまたは聖書の物語のイラストを示すシルクのフラグと敷物、これらのすべては日本人の道徳的な再教育に向けていた。

3. 1555年～1579年

イエズス会の史料から判断すれば、この期間にいくつかの教会は内部空間が長手方向に従い配置していたことを強く示唆する言及が発見できる。すなわち、間取りについては視覚的な障害物や座敷などを持たない質素な矩形の空間であった。教会の空間は事実的な機能を持ち、説教をする者の姿が観客全体からはっきり見えなければならなかった。その床は必ず畳で覆われてい

て、ミサへの出席を重んじたキリスト教徒は、正座の姿勢で座った。日本にいた外国人宣教師たちは建築の専門家ではなかったため、教会の劇的な要素のほとんどは建物の内部には存在せず、装飾によってもたらされていた。

日本の建築的要素の採用については、他宗教の神々を表現・象徴しないと異教徒によって崇拝の対象にならないオブジェクトと形態は許容であったと考えられる。従って、長崎でキリスト教徒によって五輪塔を破壊しながら、南蛮屏風に描かれた教会の花頭窓やキリシタン風の舟形墓碑の存在を理解できる。

4. 1580年～1600年

1570年から1579年まで日本のイエズス会の布教長として活動したフランシスコ・カブラルは一応日本文化適応の対策を否定し、ヨーロッパ風の習慣と原則に戻そうとした。その結果の一つは、教会と居住の汚さ、日本礼儀が守れない空間の欠陥と宣教師が礼儀を弁えずための失礼な行為については大村純忠・大友宗麟などの大名から多くの批判が生じた。

しかし、1579年来日したイエズス会インド管区の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノはこの状況に不満になり、もう一同文化的な適応の対策を復活した。当時ほとんどの教会の建築は日本の構法に適応していたが（日本風の縁側・畳・パティオ・足洗い用の樽・女用の座敷・チャペルの両側に座敷を置くことなど）、チャペルはヨーロッパ教会の同様、建物の長軸方向に沿って位置すべきである、教会の建設のための資金を使用し過ぎることを避けるべきである、寺社と同様に、教会の内部は必ず清潔にすべきである、といった点がイエズス会のなかで決定された。

従って、長崎の岬にあったイエズス会の本部は港市と同時に拡張化と要塞化の過程を通じた。本部の中で無秩序なように日本人の貴族を適切に収容できる施設が建てられ、港市の保護のために火炮を持っていた防壁も構築された。岬の本部の豪華な発展に対して、港市の郊外には小さな礼拝堂のネットワークが形成されていて、長崎の外町で住んでいた病者と貧しい住民の選択肢になった。

5. 1601年～1613年

これはイエズス会と他のキリスト教組織にとっては最も繁栄した時期であり、日本の一番豪華な教会が長崎で建てられた（聖母の被昇天教会）。三つの身廊をもって、岬から浜に突出したメインチャペルは大きな木製の構造によって支えていた。時計塔、男女別の入口、大規模なレタブルムと教会を飾る豪華な金属の備品もあった。港市にあった教会のすべては鐘塔を装備していた。

イエズス会本部地区には豪華な宿舎があり、ある部屋は賭場、茶の湯と奥庭を持っていた。これはイエズス会の清貧の誓いという規則に反対したが、多数の有力な日本人商人と貴族が本部を訪問していたので不可欠な施設であった。しかし、借金がかんでいたのも、宣教師の手紙では建物を維持・拡大することはかなり困難になったと書いている。

6. 1614年～1622年

この時期から、外部への貿易ルートは徐々に減少しはじめた。この理由から、外国貿易が許された少数の港の一つとしての長崎は、玄関港へと変質した。

教会の破壊にもかかわらず、長崎の住民は自由に遺跡を礼拝している。幕府の態度は徐々に激しくなり、密かに建たれた礼拝堂、殉教者を祀る二六桜の木と祭壇も破壊された。祖先の礼拝は日本社会の本質的な特徴であったので、幕府は最後の手段として墓地でキリシタン墓を冒涇した。崩壊された教会の地は道、庄屋、牢屋、兵士と奉行用の建物と日本宗教の寺院に変換された。奉行の意図は、住民にこれらの場所へのアクセスを禁止し、キリスト教徒の目から非表示にすることであった。

最初に幕府は日本宗教をサポートするのに気が進まなかった（住民から反乱の恐れ）が、1620年から寺院の復活活動を奨励した。寺社は港市を囲んで宗教的な周囲を形成した。住民は宗派の信者になることを余儀なくされ、僧侶の主な仕事は元キリシタンの活動をスパイすることになった。